



都上りの詩篇 詩篇131篇

詩131

2013.1.31

x高 { 1a 心を高くしない、目を上げない。
 1b 大いなる事の中を歩かない、不思議な事の中を } 私には和らぐ心にて
 惜しい事 = 知恵

静 { 2a 魂を和らげ、静めよ。 奇い
 2b 乳を飲み終えた子のようにx2 魂。 } 満足する。 105.

3 主を待ち望め。

都上り、エルサレム、神殿とのつながりは何?

- Ps126 大いなる事を歩く
- Ps127 眠っている間に建てられる。
- 2歴1:105 与えようが願え。
8:9 大いなる喜び、大いなる民の王にほめた。
- 10 大いなる民をさばく知恵を和らげる。
- 2:5:9 大いなる家、奇い家 (大いなる奇い家)
- 2歴7:16 「私自身と私心は、いつもここにある」
→ 神殿は、家の中に住まい、聖なる所
6:41 8:11

箴言6:17 主が忌み嫌うもの「高ぶる目...」

ヨブ42:2-6 自分で知り得ない不思議。

行伝7:6 高ぶる者 vs 満足する敬虔。

- Ps121, 123 主に目を上げる。
- Ps123 奇いと和らげ静める、高ぶる者。
- Ps130, 131 主を待ち。 Ps130 - 罪を赦す。
Ps131 - 平安。

詩篇131篇、都上りの詩篇がそろそろ終わりに近づいているところです。

130篇と131篇が、「主を待て」という詩篇で、2つを一緒に見なければならぬものですね。「乳離れした子」というふうに訳されますけれど、「乳を飲み終えた子」という言葉ですので、この乳を飲み終えた子というのは、おっぱいが飲み終わって、眠りに入っちゃった安心しきっている赤ちゃんというほうが、乳離れしておっぱいを飲み終わったという2つの意味があるけれど、その3歳、4歳になって子供になったという意味ではなくて、安心しきっている赤ちゃんというほうが、この訳としてふさわしいのだろうと思われます。

1が2つ、2が2つ、3の3つに分かれていますね。1の2つというのは、ローローロー。何々しない、何々しないと続いています。心を高くしない、目を上げない。次に、大いなることの中を歩かない、不思議なことの中を、というふうになっています。「しない、しない、しない、しない」ということですね。2節で「たましいを和らげ静めます」。その例えが2つ書かれていて、「乳を飲み終えたこのように」というのが2回繰り返されています。満ち足りているということです。3節に「主を待ち望めとこしえまで」ということですが、1-a、1-bは、「高ぶらない」ということですが、箴言6章の17節にあるように、「主が忌み嫌うもの6つある、いや7つある。」の筆頭、高ぶる目。この高ぶる目と同じことです。目を高くしない、上げない。

ヨブ42章に、「自分でも知り得ない不思議を話してしまいました」という言い方がありますが、私は知らないのだということを悟っている。これが知恵だということですね。それに対して、満足している、たましいを和らげ満足しているという、静かにしているということが対比されていますけれど、例えば、第1テモテの6章を見ると高ぶる者と満ち足りることを伴う経験というのが対比されていますので、この高ぶることと満

足して静まっていること。これが対比されるものだという事は、そこでも分かると思います。

目を上げるは、都上りの中では121篇と123篇に、神様に向かって、天に向かって目を上げる。これが正しい目の上げ方ですね。123篇には、この満足している者の反対、安逸をむさぼる者、高ぶる者というのが、その目を上げますの詩篇の終わりのところに出てきます。

130篇も131篇も、主を待ち望むということを励ます詩篇ですけど、130篇の方は、罪が赦されること。131篇の方は、赦されて神様と共にいるので平安であるということ。この2つを求めている「主を待て」ということになりますね。都上りの詩篇ですので、都とのつながりを考えることは大切だと思われます。

126篇に、大いなることをなされて連れ出された。127篇には、眠っている間に建てられるということがあります。大いなること、奇しいことをなされて連れ出されることは、出エジプトのストーリーの中によく表されている。あれも夜ですね。救いが来ましたね。

大いなる奇しいわざをなして救われるということなのですけど、第2歴代誌の1章、ソロモンに「何を与えようか願え」と神様が仰った時のソロモンの答えを見たりすると、父ダビデに大いなる恵みを施されて、その約束の通りに大いなる民の王が与えられた。それで、「大いなる民を裁く知恵を下さい」と頼んでいますけど、この大いなる偉大な神様の偉大な国民、この「大いなる」ということと、131篇の「大いなる」ことというの、大いなるが同じですね。2章になると、家を建てることですけど、家を建てる時の言い方が、大いなる宮、奇しい宮、その大いなる神殿、奇すしい神殿を建てなければならぬんだということを説明します。その大いなる奇しいというのが、この大いなること、不思議なことと言われている131篇の1節のbのところですね。大いなる奇しい家であるというのは、大いなる奇しい方が住む家だから、大いなる奇しい家であるということは、相応しいわけです。神様ご自身が、大いなる奇しい方であるということです。

建てられた神殿、神殿が建てられて、第2歴代誌の6章で、その神殿を捧げました。そうすると、神様はそれに答えてくださって、「私の目と私の心はいつもそこにある。私の心は誇らず、私の目は高ぶらない。」というへりくだった131篇を歌う人に対して、神様は「私の心と私の目と心はいつも神殿にあります」というふうに答えてくださいます。神殿は安息の住まいで、聖なるところであるということは、神様が共にいてくださることだということは、この約束からも分かる通りですけど、その神殿を捧げた時に、ソロモンが祈る罪の赦しを求める祈り。そして安息の場所に神様が共に住んでくださいという結論という言い方で結ぶ、神殿を捧げる祈りの大きな求めているところ。その130篇と131篇。その神様が神殿に来てくださることを待っている詩篇のひとつです。